

ピラトの判決：無罪、しかし死刑

ルカ福音書23:13-25
(新改訳2017訳)

23:13 ピラトは、祭司長たちと議員たち、そして民衆を呼び集め、
23:14 こう言った。「おまえたちはこの人を、民衆を惑わす者として私のところに連れて来た。私がお
まえたちの前で取り調べたところ、おまえたちが訴えているような罪は何も見つからなかった。
23:15 ヘロデも同様だった。私たちにこの人を送り返して来たのだから。見なさい。この人は死に値す
ることを何もしていない。
23:16 だから私は、むちで懲らしめたうえで釈放する。」
23:17 【本節欠如】
23:18 しかし彼らは一斉に叫んだ。「その男を殺せ。バラバを釈放しろ。」
23:19 バラバは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者であった。
23:20 ピラトはイエスを釈放しようと思って、再び彼らに呼びかけた。
23:21 しかし彼らは、「十字架だ。十字架につけろ」と叫び続けた。
23:22 ピラトは彼らに三度目に言った。「この人がどんな悪いことをしたというのか。彼には、死に値
する罪が何も見つからなかった。だから私は、むちで懲らしめたうえで釈放する。」
23:23 けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その
声がいよいよ強くなっていった。
23:24 それでピラトは、彼らの要求どおりにすることに決めた。
23:25 すなわち、暴動と人殺しのかどで牢に入れられていた男を願いどおりに釈放し、他方イエスを彼
らに引き渡して好きなようにさせた。

【祈りながら考えよう】

- (1) ピラトはどうして2つの妥協案を出さなければならなかったのですか。
- (2) ユダヤ人たちがイエスを十字架につけた血の責任を問われた歴史を簡単に説明して下さい。
- (3) 人の罪をきよめるのはイエスの十字架のみであることを説明して下さい。

【解説】

(1) ピラトの妥協案

イエスはひとたびピラトのもとから離れて、ガリラヤの国主であるヘロデの所に送られた。

しかし、ヘロデもイエスに何ら罪を認めることができなかった。ただヘロデは、かねてから噂に聞く様々な奇蹟をイエスに行わせて、それを見ようとした。しかし、それが1つも聞き入れられず、イエスは一言もお答えにならなかったし、何もなさらなかった。

結局、罪は全然認めることができなかつたが、自分の願いに反したということでイエスを侮辱し、みんなと一緒に嘲弄して、華やかな衣を着せてピラトの所へ送り返した。それが前回のところである。



結局ヘロデにおいてもピラトにおいても、死に当たるような罪をイエスに認めることは出来なかった。そこで、
《ピラトは、祭司長たちと議員たち、そして民衆を呼び集め、こう言った。「おまえたちはこの人を、民衆を惑わす者として私のところに連れて来た。私がおまえたちの前で取り調べたところ、おまえたちが訴えているような罪は何も見つからなかった。ヘロデも同様だった。私たちにこの人を送り返して来たのだから。見なさい。この人は死に値することを何もしていない。》

こう言って、イエスを訴えてきた祭司長、役人、ユダヤ人議会の議員たち、群衆を呼び集めて、ピラトはイエスに罪なしということを行った。

①妥協案(1)

しかし、ここではっきり罪がないと言いながら、ピラトは1つの妥協案をユダヤ人たちに出している。16節、
《だから私は、むちで懲らしめたうえで釈放する。》

②妥協案(2)

それからもう1つの妥協案を出した。それは17節、本節欠如となっているが、マタイ、マルコの方にははっきりこのことが記されている。

《ところで、総督は祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することにしていた。》(マタイ27:15)
祭りのたびに、このローマの総督がユダヤ人たちの歓心を買う意味で、死に当たるような囚人を一人釈放することが慣わしになっていた。ピラトはこれをも利用して、イエスをゆるすことを群衆に対して言わせた。2つの妥協案を出したわけである。

しかし、ピラトがこのような妥協案を出したことによって、かえってピラト自身が窮地におちいることになってしまった。別にこんな妥協案を出す必要はないのである。

全然イエスに罪を認めないのだから、また、ヘロデの所に送っても、ヘロデも何も罪状についての言葉もなく、ただそのまま返してきた。ピラトがここで言っている通りである。

イエスにはいささかも罪がない。それをはっきり認めている。だったら、むち打ちの刑に処することは一体どういうことか。罪を認められない者に、なぜむちを打たなければならないのか。これはピラトのユダヤ人に対する弱腰である。

また第2には、全然罪がないと認め、みんなにもはっきりと言っているのに、なぜ、祭りのたびに一人の囚人を赦してやることになっていったという習慣を取り出して、イエスをゆるすように持ち出さなければならないのか。ピラトは何とかしてユダヤ人たちを納得させてイエスをゆるそうとした。

(2) 立場を守る者の弱み

この妥協案はかえって群衆がピラトの弱みに付け入る結果となった。結局ピラトが願うようなことは全然聞き入れられず、ユダヤ人の群衆が思うままにするという結果になった。意味もない妥協案、これは結局自分の弱みに相手を付け入らせるだけのこと、何の意味もないことである。

なぜピラトはこのような妥協案を出さなければならなかったのか。彼はローマの総督である。常日頃ローマの総督としてユダヤ人たちの上に君臨し、権力、権威をもって臨んでいたピラトである。なのに、なぜ小さな被支配民族であるユダヤ人たちの前に、このような妥協案を出さなければならなかったのか。

ここに、自分の立場を何とか守ろうとする人間共通の弱みが、このピラトにおいて現れている。人間は自分の立場を保ちたい。失いたくない。ピラトがこのように群衆に対して弱みを出したのは、要するにその1点である。

もし、まかり間違っても、ユダヤ人の中にこんな事から暴動が起こったらどうしようか。自分の背後にあるローマ帝国、カイザルから与えられている総督としての権限、これは、ピラトにとって大きな力である。

しかし同時に、ローマのカイザルの権力が彼の大きなよりどころであるだけに、このカイザルからの不興を買うということは、ピラトにとっては最も恐ろしいことである。自分が治めている民たちの中から暴動が起きるということは、これを治める者として非常に恥すべき事である。

これはそのままローマに聞こえて、カイザルの不興を買うことになる。これがカイザルを権威とする総督ピラトの弱い所であった。自分の総督としての立場を守るために、威張っているように見えて実は群衆を恐れる者であった。

(3) ねたみを正当化する悪魔の心

《ところで、総督は祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することにしていた。》(マタイ27:15)
マタイの方ではこのことがはっきり言われている。

《そのころ、バラバ・イエスという、名の知れた囚人が捕らえられていた。それで、人々が集まったとき、ピラトは言った。「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである。ピラトが裁判の席に着いているときに、彼の妻が彼のもとに人を遣わして言った。「あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢でたいへん苦しい目にあいましたから。」》(マタイ27:16-19)

このピラトの妻の出来事は、ルカにもマルコにもない、マタイだけの記事である。ここに「彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである」とある。

ユダヤ人の民衆が、イエスの力ある言葉とそのわざとに引きつけられて、これこそ神より遣わされた偉大なる預言者、またこれこそメシヤであるということで、続々とイエスのもとに集まって行く。

それに対して、ユダヤの宗教的な特権階級にあったパリサイ人、律法学者、祭司長たちが妬んで、何とかしてこれを亡き者にしようとする。そういうふうにはピラトは見取った。

表面は神を冒瀆する者だとか、様々なでっち上げの罪状がイエスに付けられていたけれども、その訴える者の心の根にあるものは妬みであった。自分たちのユダヤ教における特権的な宗教上の立場が揺らぐこと、そこに彼らの自己防衛が働き、それがイエスを亡き者にしようとする結果になって現れていった。

(4) つけ上がってゆく群集心理

《しかし彼らは一斉に叫んだ。「その男を殺せ。バラバを釈放しろ。」バラバは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者であった。》

バラバはエルサレムで暴動を起こした、暴動の指揮者であった。多くの殺人が行われた。ローマの法律に真っ向から違犯した者、法によって裁かれるべき者、死罪に定められるべき者である。ところが、ユダヤ人たちはこのバラバをゆるすことを要求した。

それこそそれっきとした囚人、死に当たる囚人、エルサレムの都で暴動を起こしたのであるから、ユダヤ人にとっては非常に迷惑をこうむった存在である。

ユダヤ人であれば誰もが知っている、これを持ち出せばいくらなんでもイエスをゆるすことになるかとピラトは考えた。ところが、ピラトの弱腰を見て取った群衆は、そんなことで聞くものではない。何とかして自分たちの意思を貫徹せずにはおかない。相手が弱みを見せれば見せるほど、いよいよつけ上がっていくのが群衆心理である。

《ピラトはイエスを釈放しようと思って、再び彼らに呼びかけた。しかし彼らは、「十字架だ。十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは彼らに三度目に言った。「この人がどんな悪いことをしたというのか。彼には、死に値する罪が何も見つからなかった。だから私は、むちで懲らしめたくて釈放する。」》

それでもピラトは3度まで群衆に向かった。それだけイエスには罪がないことが、文句なしに彼には認められていたからである。ところが群衆の方は、いよいよただ燃えていくだけであった。わめき立てる声が大きくなって行くだけだった。

《「この人がどんな悪いことをしたというのか。彼には、死に値する罪が何も見つからなかった。だから私は、むちで懲らしめたくて釈放する。」》

ピラトの方ではどこまでも話し合っていくとした。ところが相手は、対話なんか受け付けない。ただ言うことは同じである。一方的である。

《けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その声がいよいよ強くなっていった。》

大声をあげて詰め寄り、今にどんな事が起こるかかわからない。相手を弱しと見て取ったから、群衆の方はただ勢いが増すばかりであった。

(5) 弱みを見せた結果

《彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その声がいよいよ強くなっていった。》

この不当な群衆の声が、「いよいよ強くなっていった」弱みを見せると、どういう結果になるか。妥協しないでもいい事を妥協するという結果がどうなるか、自分の身を守るために、しないでいい妥協をしていく。その結果がどうなるか。かえって逆になる。ピラトはここで暴動を恐れた。そしてカイザルの不興を買うことを恐れた。

ピラトが見せたこの弱みは群衆の心の中に、しっかり残っていった。だからそれから先、何度かユダヤ人の暴動が起こった。そのためにピラトは紀元37年、ローマに呼び出されて、その不始末をとがめられ、彼はついに自殺して、その生涯を果てたということが言われている。

もし、この時ピラトが、どこまでもイエスに罪なしとするなら、こういう時にこそローマの総督の権威において、しかも法の権威において、たとい全ユダヤ人が声を合わせて要求しても、その不当は一切受け付けない、その態度をもって臨んだらどうであったか。暴動なんか起こらなかつたに違いない。この断固たるローマ総督の態度に群衆はたじろぎ、やがて声を収めていったに違いない。

(6) 血の責任を問われる歴史

ピラトはそこで最後にどうしたか。マタイ27章22-26節から読もう。

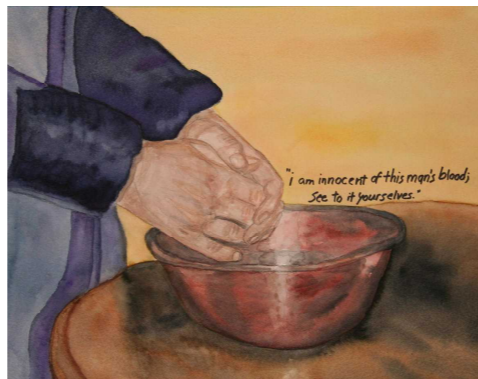
《ピラトは彼らに言った。「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはみな言った。「十字架につけろ。」

ピラトは言った。「あの人がどんな悪いことをしたのか。」しかし、彼らはますます激しく叫び続けた。「十字架につけろ。」ピラトは、語ることが何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。

「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」すると、民はみな答えた。「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。」そこでピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡した。」

(マタイ27:22-26)

これはマタイだけにある記事である。いよいよどうしようもない。そこで水を持って来て、群衆の前で手を洗った。《この人の血について私には責任がない》



では、お前たちの言うとおりにするが、責任はお前たちが持つということである。私はなんの責任もないぞ。お前たちがどうしてもやれと言うから私はやるだけのことだ。この罪なき者の血を流す責任を私は取らない。お前たちが取れ、私には何の責任もないぞ、というしるしに、みんなの前で手を洗ったわけである。

《すると、民はみな答えた。「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。」》

これは恐ろしいことであるが、熱狂的になっていると何を言ってるか自分でも分からない。いいとも、いいとも、その血の責任は我々が負うよ。我々だけではない、子孫の上にかかってもいい。こう言ったわけである。

①血の責任 (その1)

しかし、口から出まかせに言ったような言葉でも、人間の言った言葉は必ず責任を果たさなければならない。罪なき神の御子キリストを遮二無二十十字架につけて殺した。そしてしかも《その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に》と断言した。この言葉は生ける神の前に必ず問われなければならない。

その血の責任はまさに彼らの上にかかった。それがまず大きく現れたのは紀元70年、あのユダヤ戦争の結果である。彼らは紀元66年に大がかりな暴動をローマに対して起こした。そして戦争が3年、4年と続いた。

彼らはエルサレムに立てこもって戦った。しかし、ついに紀元70年、完全に敗北した。その敗北のさまは、史上ほかでは見られないような惨憺たる敗北であった。

カイザリヤのエウセビオスという紀元4世紀に生きたキリスト教史家(教会史の父と言われる人)が、ユダヤ人の歴史家のヨセファスの言葉を引用して、事細かにその実状を述べている。

実に惨憺たる敗北であった。何万人という人が飢え死にし、あるいは殺され、互いに食い合うような深刻な飢餓に陥る、そしてついに徹底的にエルサレムは破壊され、彼らが誇る神殿もバラバラに壊されてしまった。

審判は彼らの言葉に対してははっきりと現れた。何十万のエルサレムにいたユダヤ人は、その一部は飢え死にし、あるいは殺され、あるいは何万の人々はローマに奴隷として引かれて行った。血の始末を身をもってつけねばならなかった。

②血の責任 (その2)

しかも、それだけで済むのではない。ユダヤ人は国なき民として世界にさすらい、どこへ行っても喜ばれない存在となった。第二次大戦におけるナチスによる何百万のユダヤ人の殺戮、そこにもこの言葉の始末が現れていると言わなければならない。《その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に》

自分たちの祖先が、不当な十字架にかけて殺したあのイエスが、本当にキリストであると悔い改めてキリストを迎えるまで、彼らの上にこの言葉に対する責任が問われていくことになる。

(7) 罪をきよめるのは十字架のみ

ピラトはみんなの前で水で手を洗った。しかし水で自分の無責任を洗い流すことはできない。いくらみんなの前で手を洗っても、水でその罪は落とせない。いや、何で洗っても、罪は1点も清まるものではない。私たちは人間の罪をそんな軽はずみに考えてはならない。完全義であられる神は生きておられる。人間ならいいかげんに妥協もできる。しかし、神は1点の不義も赦すことができないお方である。

ピラトはその結末を、悲惨な生涯の閉じ方において歴史の中に残さねばならなかった。しかし、それだけでもすまない。自殺して死んだから、それでもう、その責任が逃れられたか。そうではない。むしろさらに重き責任を永遠にかけられる。その魂は永遠に神の審判によるゲヘナの火の中で苦しまねばならない。

私たちが自分の犯した罪に対し、本当にきよめられることがあるなら、それはただ1つ、イエス・キリストがこの不当な十字架をあえて受けて、私たち罪人のために代わって死んで下さったこのキリストの血潮を受けることにおいてのみ、私たちはどんな罪からもきよめられる。洗われるのである。

どんな事を自分が言ったとしても、その言葉は赦される。キリストが代わって受け取って下さった不当な十字架のゆえに、私たちが受けるべきはずのものをイエスが代わって受けて下さり、流して下さった血潮、そのゆえに私たちはきよめられる。自分の罪に対するいっさいの責任から解放される。

そうでない限り、どんなに難行苦行をしても、何かでこの身を洗っても、私たちは決して一欠片の罪をも洗い落とすことはできない。

(8) イエスに死刑判決を下す

《それでピラトは、彼らの要求どおりにすることに決めた。すなわち、暴動と人殺しのかどで牢に入れられていた男を願いどおりに釈放し、他方イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。》

ピラトはイエスが無罪であることをすでに告げていたが、人々を喜ばせるためにイエスに死刑判決を下し、同時にバラバを《釈放し》た。



破壊されるエルサレムの神殿